青葉区地域力応援通信　AOBAIRO

あおばいろ

2022.3
vol.3

青葉区

地域で活躍する魅力的な人を紹介

藤田 恵子さん（上谷本地区）
地域への愛情とつながりが活動の原動力

長津 末江さん（中里地区）
サロンで広がる地域のつながり

増田 健一さん（山内地区）
活動を支えるのは地域や人との
丁寧なつながりづくり

表紙の写真
藤田 恵子さん
（上谷本地区）

青葉区地域力応援通信「あおばいろ」とは

「あおばいろ」は、青葉区内で魅力的な地域活動をしている「人」と、その人が取り組んでいる活動を紹介する広報誌です。

皆さんの身近な地域に、こんなに素敵な活動をしている「人」がいることを知ってもらうことはもちろん、これから地域で何かを始めたいと考えている方にとって、「あおばいろ」が一歩を踏み出すきっかけとなることを目指して作成しました。

青葉区ウェブサイトにVol.1とVol.2を掲載していますのでご覧ください。
ご紹介している方やその活動についてもっと知りたいという方は、ぜひ青葉区役所までご連絡ください!

あおばいろVol.3　目次

●藤田　恵子さん(上谷本地区)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
「地域への愛情とつながりが活動の原動力」

●長津　末江さん(中里地区)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
「サロンで広がる地域のつながり」

●増田　健一さん(山内地区)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
「活動を支えるのは地域や人との丁寧なつながりづくり」

青葉区長よりメッセージ

青葉区地域力応援通信「あおばいろ」の第3号ができあがりました。

「あおばいろ」は、青葉区内で活躍する「人」にスポットをあてた冊子です。今回ご紹介する3名も、人や地域とつながりながら、地域活動に取り組んでいるとても魅力的な区民の方々です。

誰もが住みやすい街を目指し、地域活動に取り組んでいただいている全ての方に感謝を申し上げるとともに、「あおばいろ」によって、地域活動の素晴らしさが一人でも多くの方に伝わることを期待しています。

横浜市青葉区長
小澤 明夫

インタビュー

藤田恵子さん

上谷本地区
民生委員児童委員協議会
会長

地域への愛情とつながりが活動の原動力

柿の木台地区が開発中の頃から、長い間、地域を温かく見つめてこられ、現在は上谷本地区民生委員児童委員協議会の会長を務められている藤田恵子さんにお話を伺ってきました。

家族の仕事の都合で青葉区へ引っ越してきて、45年となります。25年間続けている民生委員の活動での気付きを大切にして、「番地の会」など地域のために様々な活動をしています。

◆きっかけ

「(民生委員を務めて)昨年の7月で25年になったの。青葉区は先輩方皆さんが卒業していかれるから、一番長くなったみたい」と、笑顔で話してくれた藤田さん。民生委員として長い間地域に関わり、その中で得た気付きが、藤田さんの活動において大きな基礎となっています。さらに、お話を伺っていると、民生委員としての関わり以外からも、多くの気付きを得ていることが伝わってきました。

藤田さんが「私の地域デビュー」と教えてくれたのは、藤が丘地区センターに職員として勤務していた際、地域を引っ張っていく方々と触れ合えたことです。「(この地域に)どういう方々が暮らして

上谷本

いて、どんな活動をしながら、皆さんが地域を作っているかということを、すごく学ぶことができました」と話してくれました。

青葉区以外のことも知りたいと、藤が丘地区センターを退職後、磯子区にある横浜市社会教育コーナーに10年間勤務しました。市内に1館しかない社会教育施設で、18区全てを対象としているため、各区の特色や、いろいろな活動を知ることができたそうです。

退職する際に立ち上げた「藤が丘地区センター緑のボランティアの会」では、現在も代表として、花壇の草取りや植栽といった活動を、毎月1回行っています。花好きのメンバーたちの居場所になっています

また、区の講座を受講したことをきっかけに、学校教育・子どもの育ちの支援を目的に活動する、現NPO法人あおば学校支援ネットワークの発足にも携わり、現在もメンバーとして活動しています。

◆民生委員

藤が丘地区センターに勤務していた時期に、「やってみないか?」と声をかけられたことをきっかけに、民生委員を引き受けました。初めは、寝たきりの方の介護者2名と一人暮らしの高齢者3名の5名の方の見守りを担当しました。高齢の方の様々な生き方に触れ、「これがこの先、私が行く道なんだな」と考えさせられることに意義を感じ、そこから地域にのめりこんでいったそうです。

藤田さんが民生委員として活動する思いの礎は、新任研修の時に見たドラマだそうです。民生委員役の俳優が自転車で街中を奔走する姿が、今でも記憶に鮮明に残っていて、「困っている人には、会いに行って、その人がちょっとでも楽になれるように、何らかの答えを出してあげる。それが民生委員の仕事なんだということがインプットされています」と話してくれました。

現在、30人ほどの高齢の方の見守りを担当しているそうですが、それでもまだ地域には藤田さんと全くつながっていない方がいらっしゃるそうです。「ちょっとでも情報があったら、すっ飛んで行くんですけど…」と心配そうに話し、この思いが「番地の会」の活動につながっていきました。

◆番地の会

平成27年度頃、当時の上谷本地区は、地域の見守り活動への機運がなかなか上がらない状況に頭を悩ませていたところでした。そんな折、民生委員を中心にゆるやかな見守りを行うことを目的として区が実施していた「青葉ふれあい見守り事業　上谷本地区連絡会」の中で、支え合いマップ作りの講習を受けました。藤田さんは「これだわ!」と直感すると、すぐに町内会長の快諾を得て、支え合いマップ作りに着手しました。この活動が「番地の会」です。

最初に取り組んだのは、柿の木台の同じ番地を単位とした、約50世帯の方が暮らすエリアでした。「地区懇談会を開催するのでお集まりください」という町内会長からのお手紙(会長ご自身がポスティングしてくれたそうです!)に、半分以上の世帯の方が集まってくれました。子育てをしていた時期以来、何十年ぶりに顔を合わせたご近所さん同士、「久しぶり!何してた?」と、同窓会のような大変和やかな雰囲気から話が盛り上がり、「うちはもう一人になりました」「うちは高齢の夫婦二人で暮らしています」など、参加された皆さんが近況を伝え合いました。

それぞれの世帯の状況を、一人暮らしの世帯は赤、高齢者夫婦の世帯は緑といったように色分けして示し、「ここには一人暮らしの方が住んでいるから、隣の方々は気

を付けてくださいね」と話しながら、支え合いマップに隣近所の情報を落とし込んでいきました。

柿の木台地区以外のエリアでも「番地の会」を開催し、支え合いマップ作りを広げることにあわせて、「青空サロン」も開催しました。これは、公園にテーブルと椅子を用意し、「番地の会」でつながった皆さんや通りがかった近くの住民が、気軽に参加できる場所として提供したものです。「集まれる場所って、すごく大切なんです。お汁粉を作ってきてくれた方もいたんですよ」と、話してくれました。

◆モチベーション

藤田さんが、民生委員も含め、地域で長く様々な活動を続けられている理由は、「つながり」とのこと。もちろん大変だなと思う時もあったけれど、活動の中でつながってきた人たちのことを考えると、やめようとは思わなかったそうです。地域のためにそんなに頑張れるのはなぜですかと聞くと、「お節介焼きなのよ、きっと」と、笑顔で答えてくれました。

◆目標

藤田さんの現在の目標は、新しく引っ越してきた若い世代の方々に「番地の会」に参加してもらうことです。もともと住んでいる方々や町内会の役員、民生委員などから、この地域がどのように作られているのかを伝え、そして、地域とつながるっていいことなんだと、少しでも感じてほしいそうです。「ちょっと冒険」とは言いつつも、どのようにPRすると、若い世代が興味を持ってくれるのかリサーチ中とのことでした。

「みんなで住みやすくしたいし、みんなで住んでよかったねと言い合いたい」と話し、先輩たちが作ってきてくれた素晴らしい地域や地域に対する愛情を、若い世代にも継承したいと語ってくれました。

藤が丘地区センターに取材に伺った際、地区センターを利用されている方に優しく声をかけられている姿が印象的でした。きっと地域のことも、この優しさで見守っているのだなと感じ、温かい気持ちになりました。

2017（平成29）年に開催した青空サロンの様子（横浜市社会福祉協議会より写真提供）

インタビュー

長津（ながつ） 末江（まつえ）さん

高齢者交流団体「銀の会」代表

サロンで広がる地域のつながり

平成17年に高齢者の元気な日々（アクティブシニアライフ）を願い活動する「銀の会」を立ち上げ、代表として、高齢者の活動の支援やつながりづくりに取り組む長津さんにお話を伺いました。

青葉区大場町で生まれ育ち、現在まで大場町に住まわれています。自然豊かな頃の大場町から現在の大場町への移り変わりを目にしてこられました。大場町を愛する気持ちを大事にして、地域の高齢者の活動を支援しています。

現在は「銀の会」代表として、地域の高齢者の活動支援やつながりづくりに精力的に取り組んでいます。

◆きっかけ

長津さんがボランティア活動を始めるきっかけになったのは、今から18年前にさかのぼります。5人兄弟の一番上のお兄様ご夫婦がお母様の介護を長くされていた姿が記憶に残っていて、自分も高齢者の支援をしたいと思い立ったことに始まります。

18年前に、当時あった青葉区役所別館で活動中の「あおばサロン」というボランティアグループに、毎月、その一員として参加されました。当時は2歳になるお孫さんを連れての活動だったそうです。

そのころから、将来行いたい高齢者支援活動の構想を思い描いていたそうです。現在一緒に活動するメンバーにその当時に出会った方もいらっしゃいます。人との

中里

出会いの大切さを語っていらっしゃいました。

本格的に活動スタート「銀の会・銀のつどい」

本格的な地域活動の始まりは、大場地域ケアプラザで実施された「ボランティア講座」に参加して、地域の人々とつながりができ、特に高齢者の方々の活力維持や向上に寄与することをより意識するようになったことでした。

銀のつどいのパンフレット

10周年には、会のあゆみを冊子にまとめました

そうしたことから、「高齢者活性化推進　銀の会」を結成しました。平成17年4月のことでした。

同年、区役所が行った「青葉区協働事業」に応募し、介護予防型デイサービス(サロン)として、「ほっとサロン　銀のつどい」も立ち上げ、現在まで17年間、休むことなく、サロンを月4回開催しています。

地域の魅力と地域への思い

大場町の魅力をお聞きすると、生まれ育った頃に比べると地域の様子は一変してしまいましたが、まだまだ自然が残っているところだそうです。

また、大場町外から転入される方も多く、無理なく、新しい街として発展しているところや公の施設や大学、病院も近く、生活しやすいとのことでした。

さらに、様々な分野で活躍される人材が豊富な地域で、自分のできることをボランティアでする人が多く、「銀の会」で行う講演会やイベントなどの講師は地域にお住まいの方にお願いできるそうです。

地域の魅力を熱く語られ、地域を愛している気持ちが強く伝わってきました。

銀の会での活動

銀の会は現在、ボランティアスタッフ20人、講師3人で運営しており、毎週金曜日に、大場地域ケアプラザで、参加者は20人から30人で、「ほっとサロン　銀のつどい」を開催しています。

「いく所がある」「することがある」「あう人がいる」この三つの基本理念を大切に活動しているとのことでした。

そして、その主な内容は「手芸」「絵てがみ」「陶芸」「歌」「各種ゲーム」「健康教室」などです。

新型コロナ感染が始まる前は、スタッフの心づくしの昼食の提供もあり、参加者は一日楽しむことができ、50人ほどの参加となっていました。現在はコロナによる人数制限のため、午前、午後に分けて20人ほどの会合になっていますが、その中で、月2回行われる桐蔭横浜大学尾山先生の指導による楽しい体操は好評です。

コロナ禍以前は、バス旅行、季節のお祭り、幼稚園児との交流会や講演会など多くのイベントも実施していました。

早くコロナ禍が収束して、元のような活動が再開できることを強く望まれていました。

大学の先生の指導を受け参加者全員で手指体操　皆さん真剣です

地域への感謝、参加者やスタッフへの思い

長津さんが活動する上でのモットーは、「感謝の気持ちを忘れない」です。この言葉は、ご主人からのメッセージであったそうです。

また、活動を円滑に進めるためには、「家族の理解と協力」「スタッフの協力と理解し合うこと」が何よりも大切であるとおっしゃいます。

活動ができるのも、地域の協力と理解があればこそと、感謝の気持ちを忘れません。また、参加者やスタッフを大切にする思いを持っています。

「ひとつでも得意なことがあれば、それを生かしてほしいと思います。いろいろな問題をかかえていても、「できること」「やりたいこと」が人にはあるはずです。それを生きがいにして参加してほしいと思っています。おひとりおひとりを大切にしていきたいと思っています」

そのように語っていらっしゃいました。

代表、副代表、会計担当の皆さん

行動力が生み出すつながり

新たに講座を始めたいときや協力をお願いしたい人がいると、まず行動を起こします。その人に直接お話をして考えを理解してもらい、共感を持って協力をしてもらいます。

まず行動すること、話すことを大切にしています。

4年前と2年前に病気で手術や長期間の入院を余儀なくされましたが、スタッフからの励ましや「銀の会」への思いから、早期の復帰を果たしました。

新型コロナの感染拡大で、様々な団体の活動が制限される中、長津さんは、続けることを重視しました。

そんな中、時代の流れである「デジタル化」にも積極的に挑戦しています。

締め切り3日前に知った横浜市の「リモート支援」の補助金に申し込み、補助を受けて、Zoomの会を立ち上げ、リモートでの会議や講習会を実施しています。最近では、出欠確認はメールで、会議の議事録のペーパーレス化も進めているそうです。

どんな時も、常に前向きです。

これからの銀の会と目標

今思い描いている銀の会の将来像は、会員それぞれが、自分の住む身近な地域で活動を始めることで、そのための支援は惜しまないと、熱意を語っていらっしゃいました。

そして、銀の会の後継者が育ち、地域の高齢者のつながりが続き、地域の住民の皆さんが、同じ地域に住む住民として仲良く暮らしてくれることがこれからの目標とのことでした。

長津さんのバイタリティと思いの強さに圧倒され、これからも、ますますお元気で、感謝と熱意で地域活動を続けていただけると実感したひと時でした。

インタビュー

増田（ます だ）健一（けん いち）さん

荏子田地区5公園愛護会 会長
Joy of roses（バラの会） 会長
太陽ローズガーデン・
太陽ローズハウス 代表
荏子田自治会 役員

活動を支えるのは 地域や人との丁寧なつながりづくり

ヨコハマ市民まち普請事業を活用した太陽ローズハウスの整備を筆頭に、様々な活動に取り組んでいる「大先輩」である増田健一さんに、地域活動に対する思いや「後輩」たちへのメッセージを伺ってきました。

お仕事で赴任してきたことをきっかけに、青葉区に住んで約40年になります。荏子田太陽公園を中心に、ボランティアや公園愛護会、自治会など、地域のために精力的に活動されています。

山内

荏子田に対する思い

増田さんが青葉区に関わりを持つことになったきっかけは、19歳の新人警察官として、できたばかりのたまプラーザ交番に赴任し、現在の荏子田にあたる地域を担当したことです。当時の荏子田は、山と畑と田んぼが広がる山村で、25世帯の方しか暮らしていなかったそうですが、「この地域はいいな。将来は素敵な街になるだろう」と漠然と思い、本格的に開発が始まる前に引っ越してきました。日々造成され、家が増えていく様子、そして、街ができていく過程をつぶさに見つめていた増田さんは、街の歴史を知っているからこそ、ことさら、荏子田という地域に思い入れと愛着があるそうです。

地域活動を始めたきっかけ

「現職時は神奈川県全体に奉仕してきたので、定年後は身近な地域に貢献しよう」との思いを抱き、41年間勤めた神奈川県警察を定年退職したことをきっかけとして、地域活動へと飛び込んでいきました。現在の増田さんの姿からは意外に感じますが、不規則な勤務形態であったこともあり、現役の時は地域との関わりは決して多くはなかったそうです。

２０１０(平成22)年に初めて参加したのは、荏子田太陽公園を中心にバラの管理をするボランティア「Joy of roses(バラの会)」と、荏子田小学校に通う児童の保護者(ＯＢもたくさんいらっしゃいます)による「おやじの会」でした。増田さんは、2つの団体が良い関係を構築できるよう、特に人間関係には気を配ったそうです。そして、その働きも一助となり、2つの団体が協力して荏子田太陽公園のバラの整備を大きく進めました。今でも、Joy of rosesが公園で大きな作業をする時に、「おやじメール」で一斉連絡をすると、おやじの会のメンバーがお手伝いに駆けつけてくれるそうです。

この時整備が進んだのが、この斜面の箇所です。
なお、荏子田太陽公園には公園愛護会があり、バラの管理のほか公園の清掃など、様々な活動を精力的に実施しています（増田さんより写真提供）

自治会に対する思い

地域活動を始めたことで地域のいろいろな人々と知り合い、横のつながりがどんどん広がっていく中で、荏子田自治会からも声がかかりました。初めは、受けた以上は一生懸命やらなければいけない、バラの活動を優先したい…と、断っていたそうですが、２０１２(平成24)年から役員を務めています。「自治会が滞ってしまったら、街が生きていけないんだ」と、自治会に対する真剣な思いを語ってくれました。荏子田自治会では、おやじの会や老人会といった地域の団体と協力・連携しながら、餅つき大会や流しソーメン、道路清掃など、非常にたくさんの取組を行っているそうです。

おやじの会と流しソーメンの準備をしている様子。
竹を切るところから始めます（増田さんより写真提供）

垣間見える丁寧なつながりづくり

様々な活動に携わっている増田さんですが、やはり太陽ローズハウスに対する思い入れはひとしおのようで、設立時の苦労話や現在の運営に関するお話をたくさん聞くことができました。

現在、太陽ローズハウスの光熱水費や一部の修繕費は、荏子田自治会が負担することを自治会の規約で定めているそうですが、これは太陽ローズハウスを建てる際、「みんなのものだ」という思いを、自治会のメンバーも含め、地域の方々ときちんと共有してきたからこそ、成り立っている体制なのだと話してくれました。

いろいろな人たちとの関わりにおいて、「まず人の話をよく聞くことが大事。時間はかかるけど、相手の話を聞く」「話せばわかる人が大勢だと思う」と話していたように、丁寧に相手と関係を作り、そうして広がっていく地域とのしっかりしたつながりが、増田さんの活動の基礎となっているのだなと感じました。

太陽ローズハウスのお手洗いと設置されたステンドグラスについて説明してくれている増田さん。太陽ローズハウスに設置されている2枚のステンドグラスは、設立時に地域の方2名からそれぞれ寄付を受けたそうです

増田さんより写真提供

◆モチベーション

地域のために精力的に様々な活動に取り組む増田さんですが、そのモチベーションは「私がやらなければ誰がやる」という熱い思いです。「私利私欲や(個人の)誉を求めるのではなく、地域の方に一人でもいいから喜んでもらえれば、それでいいんだ」と語っている姿がとても印象的でした。

◆これから取り組みたいこと

荏子田地区でも顕著となっている高齢化問題に対して、高齢者を地域で支え合えるように、自身の様々な活動を通じて積極的に取り組んでいきたいそうです。「皆さん、(高齢化問題を)口に揃えては言うけれど、実行に移していない。行動に移さないとだめなんです」と話し、太陽ローズハウスの代表として、高齢者が集まる将棋や習字の教室、コーヒーサロンを行う団体を温かく見守っている様子が伝わってきました。

また、責任を持って取り組んでくれる人が集まったら、荏子田地区にある全ての公園を、花と緑でいっぱいにする活動に取り組みたいとも話してくれました。

◆地域で何かやってみたいと考えている「後輩」たちへ

地域活動について増田さんは、「活動は続かないとだめ。燃え尽き症候群はだめなんだ」と、力を入れて話していました。地域活動を始めようと考えている方々へ、活動を長く続けるためのアドバイスとして、「大きな夢や目標を持つことはいいことだけど、それをいっぺんに叶えようとしないこと。息切れしないように、楽しみながら一歩一歩着実に、活動に関わる人みんなが負担を感じないスピードでやっていくことが大切」と、話してくれました。まさにこれこそが、太陽ローズガーデンの活動が20年続いている理由だということです。

また、ヨコハマ市民まち普請事業を目指す方々に対しては、「頑張ればできます。最初から諦めない」という言葉を残してくれました。

いろいろな活動に取り組む増田さんは、現役の頃よりも忙しい日々を過ごしているそうです。それでも、「自分で始めたことだから、楽しんでやってるから、全然苦にならない」と話してくれた姿に、増田さんの地域に対する思いの深さを感じました。

長津 末江さん
（中里地区）

増田 健一さん
（山内地区）

青葉区地域力応援通信「あおばいろ」

発行元　横浜市青葉区区政推進課地域力推進担当
〒 225-0024 横浜市青葉区市ケ尾町 31 番地 4
TEL:045-978-2286　FAX:045-978-2410

発行日　2022 年 3 月
印　刷　株式会社クレコミックス